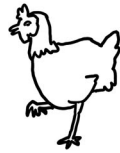


「自由で人も鶏も楽しい農業」をめざす

厚真町・小林農園



苫小牧市に隣接し、太平洋にほど近い小林農園。小規模な農場が多いケージフリー養鶏家の中で、平飼いと放牧で約7,000羽の採卵鶏（銘柄：ポリスブラウン）を飼育する、日本でも屈指のAW実践農場です。

農場主の小林廉さんは1983年生まれの若手養鶏家。札幌の養鶏場で研修後、厚真町の山奥に移り住み、10年前に200羽の養鶏を始めました。

2018年9月の胆振東部地震で被災して閉園を余儀なくされましたが、心機一転、3カ月後には現在地に移転して農場を再建。2020年に法人化し、翌年には直営の食堂&直売所「FORT by THE COAST」もオープン。15人の従業員とともに、生産から販売までの一貫経営に奔走しています。

坪あたり8羽の広さを実現

700羽を飼育するハウス型鶏舎が10棟、うち2棟は有機畜産物のJAS認証を取得しました。雌20羽に対して1羽の雄が同居し、有精卵を提供。慣行飼育と有機の違いは飼料だけで、ほかは全く同じ。5月末から4カ月間、鶏舎と放牧スペースを自由に行き来できるようにしました。

1坪あたり飼育数は8羽で、放牧時は5羽ほどになるといいます。「私がお手本にしてきた中島正さんの著書『自然卵養鶏法』では坪あたり10羽を推奨していますが、それでも鶏の糞が悪臭の原因になることがある。床を乾燥・発酵させるには、飼育密度はより低いほうがいい。鶏舎の広さ・採光・換気をきちんと行なうと、

良好な飼育環境が実現できます。1羽あたりスペースがうちより広い養鶏場はあまりないでしょう」（小林さん）

鶏舎に足を踏み入れても、不快な臭いはありません。鶏たちは、自由に餌をついばみ、水を飲み、止まり木で休み、床面を

突つき、砂浴びをする……。ここでは、生きもの本来の姿を目にすることができます。

本能や習性を理解して飼育

100～120日齢の若鶏を導入して540日齢（1.5歳）まで飼育しますが、抗生物質は投与していません（ワクチンは接種する）。

AW先進国の多くは、鶏同士の突つき合いを防ぐことを目的に、くちばしを切除するデビーキング（だんし断嘴）を禁止する流れが強まっています。「孵化場では生後10日以内にレーザーを使って（断嘴を）やっていますが、うちに来てからは基本的にしません。突つきの原因として、群れの気性やストレス、西日が差すなどの要因を考え、日常の管理の中でそれらを除去するようにしています」（小林さん）

鶏の本能や習性を理解する中で、人間がやるべきことを行なうわけです。

700羽を一群として、移動式の止まり木を10ユニット、32室の産卵箱を設置。餌箱やネットなど一部の資材は、ケージ飼育のものを転用するなど工夫も凝らしていました。

7,000羽の平飼い養鶏では、きめ細かな対応が求められます。小林さんは、「飼養環境や卵の品質などはマニュアルで管理できません。鶏に興味を持って飼育するスタッフの育成が大事。そ



5月末から4カ月間、鶏舎と外を自由に行き来できる

れができて初めて、現在の規模が保てる」と強調していました。

道産飼料にこだわり、緑餌も

鶏の本能として、青草などの緑餌を好みます。そこで夏場は毎日、鶏舎まわりなどの草を刈り取って給与。冬場は酪農家からサイレージ（発酵飼料）を購入して与えます。緑餌の有無は鶏のストレスも左右するのです。

飼料のほとんどは北海道産の規格外小麦や米ぬか、魚粉など。有機飼育の鶏には認証を受けた飼料を与えますが、飼育環境は全く同じです。有機卵は「認証された卵がほしい」と希望する取引先だけに出荷しています。

AWの基本を守り、新たな境地を開いてきた小林農園。今後、オーガニック養鶏の分野を拡大することが目標の一つといます。（滝川 康治）

※小林農園（テンアール株）

北海道厚真町浜厚真 467-1

☎ 0145-28-2726

HP <https://kobatama.com/>



代表の小林廉さんは、2013年に厚真町に移住。震災を乗り越え7,000羽の平飼い養鶏を実現。（右上）床には火山灰を入れ、「砂浴び」が大好きな鶏たちがくっつく